

---

# Une pens?e ~ 空想店主のある話

幸町

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

U n e p e n s e 〱 空想店主のある話

### 【Nコード】

N 3 1 9 1 T

### 【作者名】

幸町

### 【あらすじ】

住宅街にまぎれた、外壁が蔦が絡んでいる怪しそうな喫茶店。

そんな喫茶店の風変わりな店主と、物好きな客たちの話。

一話完結です。

## メニュー名？（こーひー）（前書き）

この物語は、実在する企業、事件うんぬんなんたらかんたらは関係ありませんとやらでフィクションです。

ゆっくり楽しんでいただければ、さいわい。

## メニュー名『？（ニービー）』

駅には程遠い住宅街にまぎれて、その喫茶店はあった。

蔦<sup>ツタ</sup>が絡んだその店は、赤いレンガの外壁がかるうじて見えて、独特な雰囲気をもっている。

ネームプレートも蔦もない、ガラスを張った焦げ茶色の扉が、よりはっきりと目立っていた。

かるうじて喫茶店とわかるのは、店頭にある明かりがつくようなタイプの看板があるからだろうか。

『Une pens?e』という文字が筆記体で書かれ、百合の花の絵を添えているというデザインの看板だ。

看板はなかなか洒落ていていいとは思わせても、店は少なくとも初めて目にした者は「ホラー？」と思わせるようなところがある。

慣れればどうってことはないが、多少、いやかなり不気味な店だった。

しかしそんな店でも訪れる、物好きな客はいたもので。

これは、そんな客と若店主の話。

○○○

セーラー服を身にまとう少女は、メニュー欄を見て顔をしかめて、うんうん唸っている。

少女は、4回ほどここを訪れていた。

新参客よりも固定客のほうが圧倒的に多いため、店主は名前は解かrazuとも顔は覚えている。

というのも、この時間帯は人があまり来ないからだ。

少女のような年齢の子も来る店ではないのは店主自身、自覚している。

そのためこの店に訪れた、学校帰りかと思いき少女が、より一層印象深く感じていた。

しばらく悩むのだろうと、読んでいた本を再び読もうとしていたが、声をかけられたので中断する。

「お決まりでしょうか」

「あの、『かふえ・お・れ』ひとつ、お願いします」

「かしこまりました」

温かいか冷たいか、どちらの飲み物をたずねる。

そして再度、注文を確認し、しばらく作業にとりかかった。

少女は、ただカウンターで、じいっと店主がカフェ・オ・レを作る

様子を見ている。

感じる視線が痛いと思うほど、店主はなんとなく気まずさを覚えた。

「お待たせしました、『かふえ・お・れ』です。……じゅっくりと  
うぞ」

店主は少女の前にカフェ・オ・レを置いた。

少女は、ふわりと微笑む。

「ありがとうございます」

しばしの静寂がおとずれた。

音楽は、店主の趣味による曲が流れているが、それも心もとない。

店主が本のページをめくる音と、少女が冷たいカフェ・オ・レを飲んで  
いる、氷がカラコロリと動くの音とが中心のようだった。

やがて静寂を遮ったのは、少女からだった。

「あの……」

「はい、いかがいたしましたか」

「……」

少女はメニュー欄を指さす。

指を差した文字は、『<sup>こーひー</sup>??』だった。

「王じゃなくて、くち、ですか？」

と言って、宙、またはカウンターを使って、指で文字を書いているようだった。

店主は、キタ、と思った。

この手の質問は多い。

慣れているためにすかさず答えた。

「ええ、“口”です。そもそも、本来であれば“口”だったようですが、あるとき間違った書き方をしたひとがいたようで、以来、日本では“王”が定着化し、今に至っているようです。そこで何故、メニューにこの書き方かということになるんですが、先代がそうしたという理由もありますが、私自身、人に“口”を定着化をいかにすべきかと、まずはメニュー欄で対抗です」

少女は納得した様子で頷き、小さく笑う。

「対抗、ですか？」

「ええ、正しい漢字だというのに間違いだと思われているのです。これを対抗として何といえますか」

少女はしばし悩む。

「……思いつきませんね」

「でしょう?」

「あ、じゃあ、この『かふえ・お・れ』は何でこうなっているのですか? 前からずうつと気になって気になって……」

『??牛乳』という漢字の上に、かふえ・お・れと書かれているが、そのまた上にこーひーぎゅーにゅーと書かれていた。

店主は思わず苦笑する。

「恥ずかしながら、横文字が苦手というだけです。先代が『??牛乳』に『かふえ・お・れ』と書いたのが、どうも納得いかなくて、つい付け加えてしまいました」

少女はなるほど、と言って、メニュー欄を見る。

確かに、筆で書いたと思われる太く達筆な文字に、申し訳ない程度でボールペンで『こーひーぎゅーにゅー』と書かれている。

少女より店主がはるかに年上だが、少女は店主に対し微笑ましく感じて親しみを覚えた。

「ごちそうさまでした、会計お願いします」

少女は席を立つ、店主はレジの前に立つ。

「『かふえ・お・れ』で合計、450円です」

少女は代金を払うと、微笑みながら去り際に言った。

「これからは、コーヒー牛乳と言いますね」

「……またのお越しをお待ちしております」

客の顔を見て対応しなければならぬのに、店主は気恥ずかしくて顔を横に、視線を反らしながら言ってしまった。

ありがとございました、を言っていないと後になって気づき反省する。

去った後の少女の背中を、視線で追う。

そして先ほどの、少女の笑顔を思い浮かべる。

次はいつ来るのだろうか、と楽しみにしているのは、店主の中の秘密である。

## メニュー名』？（コーヒー）』（後書き）

イメージBGM：フレンチポップ、70年代の昭和曲。

このときはなぜか夢見るシャンソン人形聞いていたんです（^ω^）

喫茶店名は「あんぱんせ」……ニユアンス的には「空想」とか妄そ……げふんげふんです。店主と客というより、客と客のおばかな話を書きたかったというだけのあれなので、喫茶店名は、そのまんまにしてしまったというひどいセンス。

更新予定は、これは最初から最後まで考えてないので、いまのところありません。

\*\*\*

追記

定着している漢字で表記すると、「珈琲」です。

中には「可否」だったり「骨非」だったり……と面白いのですが、個人的に当て字や漢字で、しっくりくるなあと思ったのが「??」です。

味もそうですが、漢字も奥が深いコーヒーの話でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3191t/>

---

Une pens?e ~ 空想店主のある話

2011年10月8日22時02分発行